十九、安楽寺の火中出現の庚申供養塔

　安楽寺（西五反田五丁目六番八号）は、今から四百四十年ほど前の弘治二年（一五五六）に創建された古い寺で、桐が谷村にあったただ一つの寺です。裏の崖下から泉が湧き、大きな池に注ぎ、昔は、この水が、近くに住む多くの人々の大切な飲み水に使われていました。

　この池のかたわらに、品川区の文化財に指定されている庚申供養塔、馬頭観音供養塔、題目供養塔などの八つの庚申供養塔群があります。これらの中で特に目を引くのが、塔の右上に「火中出現御影写」の文字が刻まれている、庚申供養塔です。

　庚申供養塔は、「庚申待」の人たちが一カ所に集まる印として造られましたが、やがて信仰の対象となっていったものです。区内に残る最も古い庚申供養塔は、徳蔵寺（西五反田三丁目五番十五号）の境内にあり、寛永十二年（一六三五）に造られたものです。「庚申待」というのは、六十日に一回ずつめぐってくる「庚申の日」に、神や仏に平和な生活や長生きを祈り、仲間と飲み食いしながら夜を明かす行事のことです。この信仰は、平安時代の初めて中国から伝わった「道教」の教えがもとになっています。

　人間の身体の中には、三尸という生き物が住んでいて、庚申の日に眠っていると、身体から抜け出してきて、天の神に、日頃の行いを告げ口するのです。神は、その人の日頃の行いの様子を聞いて、その人の命を決めました。だから人々は、庚申の日には、三尸の虫が天に昇らないように、夜明かしすれば長生きができる。

と信じていたのです。室町時代には、まだ貴族社会だけで行われていましたが、次第に一般の人々にもこの教えが広まり、江戸時代には、農村で盛んに行われるようになりました。

　供養塔は、自然石や板のような石に梵字（梵語を記す文字・サンスクリット）や漢字を彫ったものから次第に複雑なものへと変わりました。道教の教えになる「見ざる、聞かざる、言わざる」の三匹の猿や、仏教が影響をおよぼしてからは、剣を持った恐ろしい顔をした青面金剛が邪鬼を踏みつけている像や太陽と月、雌雄の鶏を彫ったものもあります。また供養塔は、道祖神のように魔除けの意味をもち、道しるべの役割りを果たしたものもあります。

 安楽寺の「火中出現御影写」の供養塔は、青面金剛像、日・月、鶏、三猿が細かに彫られた立派なものですが、これが造られたいきさつについては、つぎのような話が伝えられています。

　寛永十一年（一七九九）、上大崎村の農民清次郎の家が、火事になりました。この家には、近くの農民たちが共同で持っている青面金剛の掛け軸が預けてありました。

　「大変だ、おれたちの大切な庚申さまが焼ける。」

と、農民たちは、掛け軸を取り出そうとしましたが、火の勢いが強く、どうすることもできません。するとその時、激しい火の粉をさけるかのように掛け軸が天高く舞い上がり、やがて暗やみの中へと消えていったそうです。農民たちは、この一瞬のできごとを、ただぼんやりと見守るだけでした。それから三日後のことです。近くの大木の枝に、掛け軸が傷つきながらも焼けずにひっかかっているのが見つかりました。役人の高木喜左衛門が、この不思議な掛け軸に心をうたれ、写し取り、石に刻んで造ったのが、この供養塔なのだそうです。新しい供養塔のもとで、農民たちの信仰は、さらに深まったということです。

　このような話が、近くにある徳蔵寺の当時の住職の書き物に残っています。供養塔は、かつて村民の信仰を集めた供養塔として、谷山橋付近にありましたが、川や道路の改修のため安楽寺に移されてきたものです。